

見えない苦手を知ってほしい

奈良市立富雄第三中学校 3年 柳谷 優月

みなさんは、「発達障害」と聞き、どのようなことを思い浮かべるでしょうか。おそらく、マイナスのイメージを持つ人が多くいるでしょう。私は3歳から幼稚園を卒園するまで、福祉療育病院に通っていました。私は発達障害のグレーゾーンで、言葉の発音がはっきりしなかったり、短期記憶が弱かったり、一つのことに集中することが苦手でした。

当時は、幼稚園を早退して通っていたこともあり、なぜ自分だけが病院に通わなければいけないのかと、病院へ通う意味が分からなかったです。病院では、先生と発音の練習をしたり、記憶力を鍛えるための活動をしたりしました。自分では、周りの友達と同じように過ごしているつもりだったけど、言葉が上手く伝わっていないことから、自分と周りの友達との間に薄い壁があると感じることがありました。

しかし家族や先生たちは、そんな私に寄り添ってくれて「少しずつできるようにしよう」「間違っても大丈夫」と励ましてくれたり、成功した時は、一緒に喜んでくれたりしてくれました。そのことは今でも忘れていません。周りの人からの支えがあったからこそ、私は自分なりのペースで成長できたのだと思います。

私は、中学生になった今でも時々、「滑舌が悪い」などの言葉を言われることがあります。私は軽く流しているけれど、心の中では「自分が一番理解しているのだから、言葉にしないでほしい」と思っています。相手に悪気は無いと思います。けれど、私は幼い頃から少しでもみんなと話せるようになりたいと思い、努力してきたからこそ、何気ない一言がとても重く感じます。今までの努力を否定された気分になり、心にはその言葉が残ってしまいます。気にしないようにしていても、つい思い出してしまいます。

私は、このテーマで作文を書くことに迷っていました。なぜなら、自分が発達障害のグレーゾーンであることや、福祉療育病院に通っていたことを書くことで、周りの人から何か言われるかもしれないと思ったからです。「変な目で見られるかもしれない」「かわいそうと思われるかもしれない」「バカにされるかも」と不安になっていました。しかし、私は自分がグレーゾーンであることも、病院に通っていたことも、恥ずかしいと思いません。私の友達は、私のことを否定しないで、受け入れてくれると信じているから、このテーマで作文を書くことにしました。もし、この作文を読み、私に対し「かわいそう」などと思うのであればそれは少し違うと思います。私はかわいそうな子ではありません。少しだけ、周りの子よりも時間がかかるだけだと私は思っています。私は自分の経験に同情してもらうためではなく、人には見えない苦手さがあることを知ってもらうために書きました。

私は、このような経験から、人の優しさや支えてくれる人の大切さを知ることができました。また、人にはまわりから見えない苦手さや、悩みがあることも学びました。見た目では分からなくても、本人はたくさんの努力をしているのかもしれない。だからこそ、何気ない言葉が相手を傷つけてしまうことがあります。世の中には、私のように見た目だけでは分からない困りごとを抱えている人がたくさんいます。そこから私は、見た目だけで判断することなく、関わりのなかで、「この子は、こんなことが苦手なんだ。」と気づいたら、「自分がこの子にどのように、接すればいいのかな。」と考え、相手の立場になって考え思いやりのある人になりたいと思います。